

ガイダンスカウンセラーの挑戦

6

レバレッジ度の高い中高一貫校の特色ある教育

東星学園中学校・高等学校校長

おおやまさのり
大矢正則

1 レバレッジ度首都圏第一位校

東京都郊外に位置する勤務校は、私立の中高一貫校である。特色はその規模の小ささ（中高六学年で生徒数一六四名）であろうか。

その学校がこの四月、あるビジネス雑誌が組んだ『最強の中高一貫校』という特集において、レバレッジ度首都圏第一位を獲得した。レバレッジ度とは聞きなれない言葉であるが、その雑誌では、「卒業時の偏差値」から（入学時の偏差値）を差し引いた値」と定義しており、勤務校のそれは16・5ポイントと首都圏のみならず全国で最高の値となった。

このように書き始めると、いわゆる偏差値的な学力の伸長にのみ力を入れているかのようにとられるかもしれないが、そうではない。

2 ガイダンスカウンセラーが五人

小規模校であることより、ガイダンスカウンセラーの多さがこの学校の最大の特徴である。非常勤を含め教職員数は計三八名だが、うち五名がガイダンスカウンセラー有資格者である。うち一名は筆者（校長）であり、一名は英語科主任、他の三名が非常勤のスクールカウンセラー（以下、SC）である。教職員に占めるガイダンスカウンセラーの割合は13・2%であり、ガイダンスカウンセラー一人当たりの生徒数は三二・八人である。

3 「あなたはあなただから大切」

小規模校であること自体はよいことでも悪いことでもない。ただ、その中で個の尊重をきわめて重要視していることは明記しておく

たい。生徒に向かつて本気で「あなたはあなただから大切」と言えることが校是である。

4 学校心理学とガイダンスカウンセリング

さらには、学校心理学をベースにした生徒観を教職員が共有しており、教職員は生徒を、学習面、心理・社会面、進路面、健康面からなるトータルな存在（石隈利紀・田村節子、二〇一八）と見て、それぞれの発達過程で生じる課題への取り組みを援助することを旨としている。その専門家として、ガイダンスカウンセラーが要所で活躍している。

5 コーディネーション委員会

その活躍を可能にし、保障している校務分掌が校内委員会（コーディネーション委員会）である（家近早苗、二〇一六）。校内委員会は、毎週一回定期的に開催されており、構成員は、校長、教頭、指導部長（兼コーディネーター）、養護教諭、SCである。

ここでは、そのときどきに、さきほど述べた発達過程で生じる課題を抱えている生徒一人一人についての援助の方法・内容が検討される。①まずは、相談室につき「アセスメント」が必要な生徒。②保護者を含めたチーム会議（「コンサルテーション・コーディネーション」）が必要な生徒。③IEP作成な

ど「個別の対応」が必要な生徒。④「グループ対応」、すなわち構成的グループエンカウンターやクラス会議が必要な学級。こうした検討にあたっては、ガイダンスカウンセラーの専門的知識と経験が奏功する場面が多い。校長もまたガイダンスカウンセラーであるため、生徒の援助に関する方針を話し合う際、SCCとの意志疎通が図りやすい。

6 レバレッジとガイダンス

さて、レバレッジに話を戻してみよう。レバレッジ（＝Leverage）の意味を複数の辞書で調べると、名詞として使われる場合は、この力、目的達成のための影響力という意味になり、動詞として使われる場合には、影響力を行使するという意味になる。

7 レバレッジとガイダンスカウンセリング

こうしてみると、レバレッジとガイダンスカウンセリングは親和性があるように思う。この視点から少し検討してみたい。

ガイダンスカウンセラーが①「アセスメント」をする際は、その生徒のリソースを探す。つまり、強みと弱みを探す。そして多くの場合、強みに注目して、そこをとっかかりとして、その生徒がトータルで苦戦から抜け出せるような支援を探る。これはいわば、て

この支点と力点を探すような作業だ。どこを振り所にし、どこに力を入れればよいかを見きわめ、まずは小さな力でも動くポイントを選ぶ。これがレバレッジとしての「アセスメント」である。

②「コンサルテーション・コーディネーション」を考えても、この原理で説明がつく。一人の生徒を支援する大人がばらばらに力を出していたのでは、どんなにそれぞれの力が強くても生徒には上手に作用しない。それぞれが勝手に動くのではなく、チームで集まって一か所の力点に少しずつ力を注げば、作用点では十分に生徒に支援が届く。これがレバレッジとしての「コンサルテーション・コーディネーション」である。

③「個別の対応」もここにたとえることができる。学級全体がてこだとすれば、どの一点（力点）にどの向きの力（支援）を注げば、このてこがうまく作用するかを考えることで、全体を考えての個別対応ができる。個別の対応は同時に全体への対応にもなる。これがレバレッジとしての「個別の対応」である。

④「グループ対応」は、力点に教師（担任等）が、作用点に生徒全体が乗っていると考えるとよいかもしれない。ここでは支点を手前、すなわち教師側にもってきたのでは、な

かなかてこは動かない。支点を生徒側に近づければ近づけるほど教師が注ぐ力は少なくて済む。しかし支点を生徒に近づけすぎると、教師は楽ではあるが、それでは生徒の成長は期待できない。ここでもよいところに支点（視点かもしれない）を定めることが、教師の力量であるし、この視点、すなわち方向性を定めるプロフェッショナルが、ガイダンスカウンセラーということになる。これがレバレッジとしての「グループ対応」である。

8 めげせお本一

以上、レバレッジとしてのガイダンスカウンセリングについて述べてきた。ガイダンスカウンセラーには、学習面のみならず、前述の①～④の四つのサービスを生徒・保護者・教師に切れ目なく提供することによって、学校の総合的なレバレッジ度を上げることに挑戦してほしい。勤務校も本当は、そちらの日本一をめざしている。

参考・引用文献

- ・家近早苗「コーディネーション委員会」『学校心理ハンドブック第2版』教育出版、二〇一六年。
- ・石隈利紀・田村節子「チーム援助入門 学校心理学・実践編」図書文化、二〇一八年。
- ・『週間ダイヤモンド』第一〇九巻、一七号、二〇二一年。
- ・<http://jsca.guide/guidance-counselor/>